

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

西アフリカにおける指導者崇拝

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000828

第5章 西アフリカにおける指導者崇拜

竹沢 尚一郎
国立民族学博物館

1. はじめに：問題の所在

政治的指導者が崇拜の対象になることがあるとすれば、それはどのようにしてであり、どのようなときであるのか。そうした崇拜は当の政治家の資質によるものか、それとも外的な状況によるものか。指導者に対する崇拜が失われるとすれば、それはいかなる理由によるのか。指導者崇拜に関して基本的と思われるこれらの問いに対し、独立後の西アフリカのいくつかの国を例にとりながら一定の答えを用意すること。それが、本稿がめざすものである。

アフリカの国連加盟国は2013年現在54ヶ国ある。このうち、アメリカ合衆国の解放奴隷のために建国されたりベリアを除くすべての国がヨーロッパ諸国による植民地支配を蒙っている。アフリカ諸国のうち、もっとも初期に独立したのは1922年のエジプト（ただしコモンウェルス内の独立であり、真の独立は1952年のナセルによる共和制クーデターによって実現された）や、1941年のエチオピアである。サハラ以南アフリカでは、1957年に独立を達成したガーナが最初の独立国であり、「アフリカ独立の年」と呼ばれた1960年の前後に、多くの国々がイギリス、フランス、ベルギー等の支配を脱却した。

これらの国々ではナショナリズムの高揚が見られたため、その独立に際しては、高い大衆の人気とカリスマ的指導力をもつ政治的指導者が輩出した。エジプトのガマル・ナーセル (Gamal Nasser)、ケニアのジョモ・ケニアッタ (Jomo Kenyatta)、コンゴのバトリス・ルムンバ (Patrice Lumumba) がそうであり、西アフリカでは、ガーナのクワメ・ンクルマ (Kwame Nkrumah)、セネガルのレオポール・サンゴール (Léopold S. Senghor)、コートジボワールのフェリックス・ウフェ＝ボワニ (Félix Houphouët-Boigny)、ギニアのセク・トゥーレ (Sékou Touré)、マリのモディボ・ケイタ (Modibo Keita)、ギニアビサウのアミルカル・カブラル (Amílcar Cabral) が代表格である。彼らは植民地支配の枠内でさまざまな社会的・文化的運動を組織し、国内外の圧力に抗しながら、新興の労働組合から旧制度の象徴である王侯・首長までの諸団体を束ねることで、独立の実現に向けて大きな役割を果たしたのだった。

しかしながら、高い人気を誇った彼らに対する大衆的支持はアフリカの国々では長くはつづかなかった。コンゴのルムンバやギニアビサウのアミルカル・カブラルは、大衆的な人気を博していた只中で暗殺に見舞われたし、ガーナのンクルマやマリのケイタは、

その急進的な政策が国民から乖離した直後にクーデターによって倒された。一方、コートジボワールのウフェ＝ボワニやガーナのトゥーレは、たくみに国家と国民を掌握することで権力を長期にわたって維持したが、独立後20年もしないうちに彼らの政策は人心から離れ、むしろ強権支配として否定的に語られることが多くなった。

世界の他の地域の国々では、毛沢東やホー・チミンなど、生前から国民の高い人気を誇り、死後もその墓所が崇拜の対象とされているケースが少なからず存在する。それに対し、アフリカにおける指導者崇拜が一般に短命である理由はなにか。それを、具体的なケースに沿って考えていくことも本稿の課題とするものである。

2. 指導者崇拜の二つのタイプ

近代化以前のアフリカの社会では、王が国家規模の儀礼をつかさどり、いわゆる「神聖王」として崇拜の対象となっていた事例が少なからず存在した。現在のウガンダのニョロ王国や、スーダンのシルック王国、スワジランドのスワジ王国などは人類学の分野ではよく知られた例である (Beattie 1960; Evans-Pritchard 1948; Kuper 1947)。これらの王国においては、私が別の箇所で論じたように、王の個人的資質というより、むしろ政治・宗教的な制度が王の崇拜に向けて緊密に組織されていたことが、王に対する崇拜の根底にあったように考えられる (竹沢 1987, 1988)。

これに対し、ここでとりあげるアフリカ諸国の独立の英雄たちは、伝統的な政治機構や宗教的権威とは無縁なところで、しかもしばしばそれと激しく抗争しながらみずからの権威を打ち立て¹⁾、広範な大衆の支持の獲得に成功した。であれば、彼らの崇拜を考えるにあたっては、伝統的な権威構造との連続において思考することを止めることが最初に必要はらずである。

独立の英雄となり、国民各層から広範な人気を獲得することに成功したこれらの指導者のうち、私見によれば2通りのタイプ分けが可能である。第1のタイプは、現実主義的な政治的指導者であり、性急な完全独立を求めるより、むしろ旧宗主国との円滑な関係を維持しながら、政治的独立の実現と独立後の経済運営に当たった政治家である。西アフリカではコートジボワールのウフェ＝ボワニ、セネガルのサンゴールがその代表格といえる。アフリカ諸国のすべてが多民族国家であるため、彼らは国内統一の実現をなにより重視し、外部の権力を巧みに利用しながら、国内ではナショナリズムを強烈に鼓舞した。また、対外協調を重視するその政策は²⁾、外国資本の導入を可能にしたことで、独立後しばらくのあいだ高い経済成長と政治的安定を実現した。それを通じて、彼らは独立から20年以上にわたって政権を掌握することができたのだった。

これに対し、第2のタイプは、ガーナのンクルマ、マリのケイタ、ギニアのトゥーレに代表される独立の英雄たちである。彼らはむしろ理想主義的な政治的指導者であり、

旧宗主国との連携より政治と経済の自立を優先させ、西洋の植民地支配に抗するイデオロギーとしてパンアフリカニズムを前面に掲げた。彼らが求めた政治的・経済的自立はしばしば旧宗主国の敵視を招いており、たとえばトゥーレに率いられたギニアが1958年に独立を達成したとき、フランス人旧支配層は電話機1台残さずにもち帰ったとさえいわれている。そうしたこともあり、彼らの政策は独立後数年のうちに政治的孤立と経済的失敗に見舞われ、その結果、彼らの多くは軍事クーデターによって失脚した（この中ではギニアのトゥーレは例外であり、盟友のンクルマの失脚を見た彼は、ナショナリスティックかつ強圧的な政策に転じて、20年以上にわたる強権支配を実現した）。

このように見ていくと、前者のリアリスティックな政治的指導者が国内および国外政治の場で成功をおさめたのに対し、後者の理想主義的な指導者の多くが失敗に見舞われたように思われる。しかし、実際はどうであったか。

たしかに前者が指導した諸国は、独立後しばらくのあいだは高い経済成長と政治的安定を実現するのに成功した。たとえばコートジボワールは、独立後20年にわたってフランス資本と結びついてカカオとコーヒーのプランテーションの拡大に邁進し、「コートジボワールの奇跡」とまで呼ばれた高い経済成長と安定した政治環境を実現した（日本貿易振興会 JETRO 1983）。しかし、初代の指導者であるウフェ＝ボワニやサンゴールの治世が20年以上に及んだ結果、彼らの死後、くり返し政治的・社会的混乱に見舞われるようになっている。コートジボワールでは後継者の椅子をめぐる政争が生じた挙げ句、2002年以降は国内が完全に2分され、ようやく2010年の大統領選の後に挙国政府が誕生したが、フランス軍の駐留を抜きにして国内の治安と統一はいまだに不可能な状態である。一方、セネガルでも、第三代大統領アブドライ・ワデ（Abdoulaye Wade）の強権支配に対し、学生や労働者を中心とした反対運動がくりかえされ、事態の改善を見たのはようやく2012年の大統領選後であった。

これに対し、理想主義的な指導者が誕生した後者の国家では、初代大統領の失脚後も数度のクーデターがくり返されるなど、政治的および経済的混乱は長く尾を引いた。しかし今日、真の民主主義を実現しているのはむしろ後者の国家である。たとえばマリやガーナは、西アフリカでも有数の政治的安定と治安の良好さを有する国家として評価されており³⁾、人口の圧倒的多数を占める農民層に基礎をもつ堅実な経済成長の実現を通じて、アフリカ諸国のなかでも模範国家になりつつある。また、クーデターで倒された初代大統領に対する評価は、その後再評価がなされ、今日もおきわめて高いものがある。

本論文では、西アフリカで最初に独立を実現したガーナのンクルマと、フランス語圏西アフリカの代表的国家であるコートジボワールのウフェ＝ボワニに焦点を当てながら、西アフリカにおける指導者崇拜について考えたい。それに当たっては、ンクルマが具現していたパンアフリカニズムとウフェ＝ボワニが主張した一国ナショナリズムを対比さ

せること、そして前者の政治的理想主義と後者の現実主義、自主独立路線と対外協調主義とを対比させながら考察することも、本発表の狙いのひとつである。

3. ゴールドコースト（ガーナ）とンクルマの経歴

現在のガーナ、植民地期以前のゴールドコーストは金が大量に算出したこともあり、古くから北方のサバンナの諸国家と、それを經由して北アフリカとの交易路が開かれていた⁴⁾。この地にヨーロッパ勢力が達したのは、15世紀後半である。1481年にポルトガルはエルミナの地に砦を建設し、金や象牙、胡椒を中心とした交易を本格化させた。17世紀になると、アメリカ大陸や島嶼部のプランテーションに向けたポルトガル、オランダ、イギリス等による奴隷の輸出が活発になり、それにともなって沿岸地帯にアシャンティ、ファンティなどの王国が発達した。その後、通商国家として繁栄したイギリスは、19世紀にくり返しおこなった戦争を通じてアシャンティ王国を支配下におさめることに成功し、1902年以降全土を植民地として統治する。その過程で、奴隷に代わる輸出品目としてカカオ生産を導入することで、ゴールドコーストを世界有数のカカオ生産国に仕立てたのであった。

のちにガーナ独立の立役者となるンクルマは、1909年9月、ガーナ南部の小さな村に生まれている⁵⁾。父親はアシャンティ人の鍛冶屋で、複数の妻をもっていたが、ンクルマは母親から生まれた唯一の子供であった。ひとり息子として、彼は母の寵愛を一身に受けて成長したのであろう。当時のアフリカ人としては珍しく幼時から学校に通い、カトリックの洗礼を受けている。

首都アクラで高校を終えたンクルマは、数年間教員をつとめたのち、1935年にアメリカ合衆国にわたり、ペンシルヴァニア州のリンカーン大学に入学して経済学と社会学を修めた。当時の合衆国はいまだ黒人差別が激しく、黒人の大学入学は容易ではなかった。しかし、黒人解放に尽力したリンカーン大統領の名を冠するこの大学だけは、黒人に対して門戸を開いていた。当時、この大学にはアフリカ人学生が16人在籍していたが、これは合衆国に留学していたアフリカ人留学生全体の4分の1を占めていたとされている(Laronce 2000 : 35)。

アメリカ合衆国は、歴史的に南北アメリカ大陸と太平洋地域に対して開かれており、イギリスとフランスのいわば領分とされていたアフリカとは無縁であった。そのことは、1950年代の前半になっても、合衆国全体でアフリカ研究センターが1つしか存在しなかったという事実が示している⁶⁾。一方、合衆国内の黒人のもとでは、黒人の地位向上やアフリカの黒人との連帯を求めるパンアフリカニズムが20世紀初頭以来さかんになっていた。カリブ諸島出身のマーカス・ガーベイ (Marcus Garvey)、マサチューセッツ州生まれのウィリアム・デュボイス (William Du Bois)、アンチール諸島出身のジョージ・パ

ドモア（George Padmore）らによって導かれたその運動は、1909年にパリで第1回パンアフリカ会議を開き、1921年にブリュッセルで第2回、1923年にはロンドンとリスボンで第3回会議を開催するなど、着実に影響力を高めていた⁷⁾。ンクルマはリンカーン大学在籍中にこのパンアフリカニズムの洗礼を受けており、ガーナを含めたアフリカ諸国の独立と黒人の文化的価値の承認をなにより優先させるようになっていた。

ンクルマは1939年にリンカーン大学の学部課程を修了するが、滞在資金を得るために、レストランの給仕から魚の街頭販売、船員、新聞の売り子など、さまざまな職業を経験したようである。彼の自伝には、その間の労苦が人種差別の経験とともに詳細に書かれている（エンクルマ 1963：45-51）。1939年から1942年まで、リンカーン大学で助手を勤められたわら神学部⁸⁾に在学し、1942年にはペンシルヴァニア大学に移って、教育学と哲学の修士号を取っている（エンクルマ 1963：43）。その一方で、「アメリカ・カナダ在住アフリカ人学生連盟会議」を主催して、その議長をつとめるなど、合衆国に滞在するアフリカ人留学生の組織化にもつとめていた。

1945年、ンクルマはガーナに帰国する前にイギリスに行き、そこで博士号を準備しようとする。しかし、彼がイギリスで出会ったのは、第二次世界大戦後の混乱と沸騰のなかで独立を希求するアフリカ諸国出身の学生や知識人であった。政治運動にのめりこんでいった彼は、パンアフリカニズムの指導者の1人ジョージ・パドモアと出会い、マンチェスターで予定されていた第5回パンアフリカ会議の開催に尽力して、その共同書記をつとめている。この会議は、知識人主体の前の4回と異なり、アフリカの労働組合や農民組織、協同組合、学生などの活動家を主体としたものであった。そしてこの会議以降、ンクルマはゴールドコーストの独立を明確に志向するようになっていったのである。

その頃、彼の故国ガーナでは、カカオの買入価格の暴落などにより、英国支配に反対する気運が高まっていた。そのなかで、大商人や農園主、旧首長などが結成した「統一ゴールドコースト会議（UGCC）」が運動を組織するために総書記を探していた。この会議は「長老」と呼ばれた旧支配層を中心とするものであり、イギリス連邦のなかでの独



ンクルマ

立に向けた微温的なものであり、即時完全独立を求めるンクルマの思想とは相いれないものであった。そのため彼は就任に躊躇したが、結局依頼を受け入れ、1947年11月に12年ぶりに故国へ戻ったのである（エンクルマ 1963：69）。

当時のゴールドコーストの状況はいかなるものであったか。1947年の段階で、カカオ農園の就業者20万人、鉱山労働者3万人、都市労働者4万人とされており、これがのちに独立運動の主力となった（Kaké 1991：59）。また、小学校の就学率は30パーセントを超えており、これは当時のアフリカ諸国の中では例外的に高い数字であった（Kaké 1991：61）。ンクルマが所属した「統一ゴールドコースト会議」は保守的な傾向をもっていたが、彼は都市労働者や小中学校教師、女性などと連帯して、内部に青年組織を立ち上げた（エンクルマ 1963：98）。これが、以降彼の政治的支柱となる「会議人民党（CPP）」の1949年の結成へとつながっていくのである。

ンクルマの帰国以降、ガーナの政局は急展開を見せる。1950年1月、国内のほぼすべての商店が閉鎖されたゼネストが実施され、ンクルマは非暴力運動を主張していたにもかかわらず逮捕・投獄される。しかし、1951年2月の総選挙において、獄中から立候補したンクルマの「会議人民党」が38議席中33議席を獲得して圧勝する。これにより、ンクルマは植民地支配下のガーナ政府の首相に選出されたのであった。そして、1957年の独立とともに首相に就任し、1960年には憲法改正と大統領選挙を実施して、90パーセント以上の票を獲得して初代大統領に選任されたのである。

4. パンアフリカニズムの旗手としてのンクルマ

1951年の首相就任から1966年のクーデターによる政権の転覆まで、ンクルマの執政は5年間におよんでいる。彼が長期にわたって政権を維持できた理由は、その個人的なカリスマや熱意に加えて、なによりガーナの主要産業であるカカオの価格上昇にあった。ガーナの独立の年である1957-58年に、カカオの国際価格はトン当たり352ポンドの最高値をつけていたし、もうひとつの主要輸出品である金の産出量も世界の5位以内に入るほどであった（山口 1977：103）。

これらの資金を吸収するべく、彼はカカオの仲買組織である「カカオ買い入れ会社（CPC）」を国中に張り巡らせ、それで得た資金を農民に低利で貸し付けることで、カカオの生産を拡大すると共に、支持基盤の確立につとめた（谷本 1968：136sq.）。それと並行して、ガーナの経済基盤を多角化・安定化するべく、積極的な産業振興策を遂行した。教育を重視した彼は初等教育から大学までの各種学校を築き、アフリカーといわれたほどの数の病院を建設し、カカオのモノカルチャーから脱するために商品作物の多角化を奨励し、ヴォルタ川にダムを建設して電力をまかない、鉄道や港湾、工場等の建設に積極的に投資した⁹⁾（エンクルマ 1964：143sq.）。

このような国内産業の振興策と同時に、いやそれ以上にンクルマが力を入れたのは、彼の念願であるパンアフリカニズムの実現のための外交政策の展開であった。政府の顧問に、長年アメリカ合衆国でパンアフリカニズム運動に携わっていたジョージ・パドモアを迎えると、彼は1958年4月にアクラで「第1回アフリカ独立国会議」を開催する。この会議への参加国は、エジプト、ガーナ、スーダン、リビア、チュニジア、リベリア、モロッコ、エチオピアの8ヶ国だけであったが、その成功を踏まえて1958年11月には、「第1回アフリカ人民会議」をやはりアクラで開催する。この会議の冒頭でンクルマがおこなった演説は、パンアフリカニズムを高らかに歌い上げるものであった。

すでに申しましたように、この会議はアフリカの歴史における新たな時代を宣告するものであります。それは、この大陸からのコロニアリズムと帝国主義の消滅に向けたわれわれの戦いと、自由で独立したアフリカ諸国連合の創設に向けた新たな時代なのです。……アフリカは独立した大陸です。それはヨーロッパの延長でもなければ、他の大陸の延長でもありません。それゆえわれわれは、われわれに固有の共同体と、アフリカのパーソナリティを發展させることを望むのです。(Laronce 2000 : 133)

政権にありながら、アフリカの状況や新植民地主義について10冊の本を著したンクルマは、卓越した政治思想家ではあったが、彼に好意的な歴史家ベイジル・デヴィッドソンをしても「政治家ではまったくない」と評されるような人間であった (Davidson 1973 : 15)。そうした彼の資質がもっとも生氣をもったのは、アフリカの統一に向けて発言し、著述したときであったに違いなかった。彼の一贯した主張は、植民地勢力および新植民地勢力に対抗するためにはアフリカの統一、「アフリカ合衆国」の建設が必要だということであり、そのための思想としてのパンアフリカニズムを散種することであった。また、合衆国で哲学をおさめた彼らしく、「アフリカのパーソナリティ」の語に代表される、アフリカの人びとの独自の生き方、独自の価値を認知しようという考えも深く根をはっていた。アフリカに、資本主義でもソ連流の社会主義でもない社会のあり方を確立しようとする彼の志向は独自の「社会主義」の提唱にいたったが¹⁰⁾、つぎの発言にはそうした彼の思想の根幹を認めることができる。

われわれは、「アフリカの伝統社会」が平等主義の原則の上に成立していたことを知っている。その実際の運営においてはさまざまなヴァリエーションがあるが、そのヒューマニスティックな原動力は、われわれをアフリカ全体の社会主義的再生に向かわせるものである。われわれは、すべての人間が単なる手段ではなく、彼自身のうちに目的を有していることを要請するし、彼の発展のために等しい機会が保障されることが必要なことを容認する。これが含意する社会・政治的实践は科学的に遂行されるべきであるし、社会・経済的政策は断固として追求されなくてはならない。あらゆるヒューマニズムは平等主義から出発すべきであるし、平等主義を保障し、存続させるために、客観的に選択された政策へと導かれなくては

ならない。それゆえ、社会主義が、科学的社會主義が重要なのだ。(Nkrumah 1967)

ンクルマの思想が他にどれだけ受容されたかはともかく、彼が開催した「第1回アフリカ人民会議」は大成功を収め、コンゴのルムンバやギニアのトゥーレ、ギニアビサウのカブラル、ケニアのケニヤッタ、北ローデシアのケネス・カウンダ (Kenneth Kaunda) など、アフリカ各地の独立運動の主役たちとの親交を深めさせた。と同時に、ンクルマを、アフリカの解放とアフリカ全域の連帯をうたうパンアフリカニズムの旗手として、そしてインドのネルーやインドネシアのスカルノらと並ぶ非同盟主義のリーダーとして、内外に認知させたのであった。それ以降、彼はガーナの外交を主導し、パンアフリカニズムと非同盟主義の実現に向けて突き進んだのである。

その頃、西アフリカのギニアは「フランス共同体」内部での自治というフランスの提議を蹴って、1958年に国民投票によって即時独立を宣言した。それに怒ったドゴールのフランスは、電灯1個、電話機1台残さずに引き上げたといわれている (エンクルマ 1971a: 35)。窮地に陥ったギニアのトゥーレはガーナに援助を求めることとなり、翌1959年、ガーナとギニアは「西アフリカ連合」を結成し、ギニアに対して巨額の援助を決定する。この連合のうちに、マリが旧宗主国であるフランスとの対立を深めた1961年には、ガーナ、ギニア、マリの3ヶ国からなるものとなった。また、1959年のコンゴ独立に際して、ンクルマと思想的・政策的に近かったルムンバ首相と、ベルギーや南アフリカの支援を受けたカサヴブ大統領が対立し、ルムンバが国連に援助を求めたときには、いち早くガーナ軍をコンゴに派遣している。このようにンクルマは、パンアフリカニズムを思想として普及させようとつとめたにとどまらず、それを他のアフリカ諸国にも根づかせるべく、ガーナの有する経済・政治・軍事のあらゆる力を動員したのである。

このような外交政策を展開するには、莫大な資金が必要であっただろう。ンクルマにそれが可能であったのは、世界一のカカオ生産が可能にしたガーナの富であった。しかし、このような性急とも思える外交政策の拡大は、ガーナ経済を疲弊させ、国内に対立を招かざるを得なかった。ンクルマがめざした国内の工業化の実現と、対外的なパンアフリカニズム政策の普及のためには、莫大な資金の投入が必要であり、それは政府によるカカオの買入価格の低下を前提とした。カカオの生産農民は彼の有力な支持母体であったが、国際価格の低下に見舞われたこともあり¹¹⁾、彼らは価格低下に不満をもち、その離反はンクルマの政治生命を危うくした。

しかも、伝統的な最高権威であるアシャンティヘネを中心とした国内の反対勢力はガーナを分割して統治することを望み (彼らは「連邦派」と呼ばれた)、ンクルマは何度もクーデターや暗殺に脅かされた。反対勢力の抵抗に業を煮やしたンクルマ政権は、反対派の弾圧と唯一党による国内支配、労働組合への政府関与を強め、その弾圧は「ヒットラーのドイツに類似した」とさえ評されるようになる (Davidson 1973: 15)。1966年、資

本主義陣営にもソ連流の社会主義陣営にも与することなく、第三世界の連帯を願うンクルマが中国とベトナムを訪問しているあいだに、首都アクラではクーデターが発生した。党员50万人、支持勢力200万人を誇っていた「会議人民党」はあえなく瓦解し、彼はそのままギニアに亡命することを余儀なくされ、1972年にルーマニアの病院で63年の生涯を終えたのである¹²⁾。

ンクルマの失墜後、ガーナは4度のクーデターに見舞われ、カカオの国際価格の低下もあって政治的・経済的な大混乱を経験した。しかし、1983年の構造調整の受け入れ以降、経済は安定し、政治的にも1998年に政権が平和裏に交代するなど、アフリカでは例外的に民主主義が根づいている。近年では、外国に移住したガーナ出身者の投資によって経済が活況を見せるなど、ガーナは着実に経済発展を実現しているのである。また、パンアフリカニズムの旗手としてのンクルマの再評価も進み¹³⁾、首都アクラ市内には銅像や記念館も建てられている。2002年には、アフリカ全体の政治・経済・軍事での協力を実現するための「アフリカ連合」が形成されたが、これはまさにンクルマの理想の実現に向けての一步であった。ンクルマの掲げた理想主義は、さまざまな紆余曲折を経ながら、今日、着実に根を下ろしつつあるのである。

5. 独立までのコートジボワールとウフェ＝ボワニの歩み

コートジボワールはガーナの西隣に位置し、ともにギニア湾に面し、言語的・民族的にも親縁性をもつ国家である。しかし、両者はいくつかの点で大きく異なっている。歴史的に言えば、金を産出したことから交易を通じて北方のサバンナの大帝国や、それを通じて地中海文明の影響を早くから受けたガーナと異なり、深い森林地帯が広がるコートジボワールはいわば西アフリカの未開拓地であった。コートジボワールの名の由来は、最初に西アフリカにやってきたポルトガル人やオランダ人が、この地に野生動物が数多



ウフェ＝ボワニ

く生息しているのにちなんだ「象牙海岸」と呼んだことにはじまっている。その未開拓の地をフランスが1893年に植民地化し、1917年には全土の制圧を完了した。フランスはアフリカ大陸の広大な植民地を「仏領西アフリカ」と「仏領熱帯アフリカ」に分けて支配したが、コートジボワールは、セネガル、モーリタニア、ギニア、マリ、ブルキナファソ（旧オートボルタ）、ニジェール、ベナン（旧ダホメイ）とともに「仏領西アフリカ」に組み込まれ、セネガルのダカールに置かれた総督府によって統治されることになった。

コートジボワールの初代大統領になるウフェ＝ボワニは、1905年に中部のヤムスクロに、富裕なバウレ人首長の家に生まれている¹⁴⁾。彼の父は、フランスが導入したカカオ栽培を拡大し、コートジボワールでも有数の大農園を所有するまでになっていた。農園主と首長の職を引き継いだウフェ＝ボワニは、コートジボワールでもっとも豊かな農園主になると同時に¹⁵⁾、1944年には「アフリカ農民組合」を組織し、その組合長になっている。この組合は瞬く間に拡大し、1945年におこなわれた選挙で、彼はコートジボワールから選出された2人のフランス国会議員のひとりになっている。

コートジボワールのおかれていた経済的状況を理解するために、ここで簡単にフランスの西アフリカ支配の経緯をたどっておこう。フランスのアフリカ支配は西端のセネガルからはじまり、19世紀半ばには換金作物として食用油や石鹼の原料となる落花生の栽培を導入している。フランスはダカールに海軍基地をおき、広大なフランス植民地支配の要石として、また南米とを結ぶ航路、航空路の中継地として重視した。また、経済的にもセネガルはフランスのアフリカ植民地のなかで最重要であり、1920年代には「仏領西アフリカ」からの輸出高の65%を占めるほどであった（竹沢 2001：184）。フランスがいかにセネガルを重視していたかは、1872年にセネガルの4つの都市（ダカール、サン・ルイ、ゴレ、ルフィスク）をフランスの直轄地とし、この都市の住民に対してのみフランス市民権を付与したことに示されている。

しかし、雨量の少ないサバンナ気候が国土の大半を占め、古くから国家や交易の発展していたセネガルでは、換金作物としての落花生の導入は比較的容易であったが、経済的な限界に達するのも早かった。これに対し、熱帯雨林地帯の広がるコートジボワールでは、初期の開発こそ困難であったが、カカオやコーヒー、バナナなどのプランテーション農業を実施するには最適の環境であった。コートジボワールにおけるカカオ栽培は、1913年の235トンから、1926年には6.4万トン、1932年には19.3万トンと爆発的に増加しており（竹沢 2001：135）、1950年代になるとセネガルを追い抜いて仏領西アフリカ最大の富の源泉となっている。ウフェ＝ボワニは、こうした経済発展の波を最大限に活用したわけである。

第二次世界大戦がはじまるとフランスはドイツに敗れ、その影響下に組み込まれたが、アフリカ植民地の多くは反ドイツを掲げるドゴールが率いる「自由フランス」の側に立

った。そのおかげで第二次世界大戦の戦勝国となったフランスは、戦後「フランス連合」を構成し、植民地にも一定の代表権を付与した。ウフェ＝ボワニがフランス本国の政界において頭角を現したのは、1947年にフランス議会在、強圧的植民地主義の名残りである強制労働を廃止したときであった。彼は新しい法律の制定に尽力し、この法律は彼の名をとって「ウフェ＝ボワニ法」として批准されている。

1946年、彼は「アフリカ農民組合」を「コートジボワール民主党」に改組し、同年末にマリのバマコで開かれた会議で仏領西アフリカ全体の政治組織「アフリカ民主連合(RDA)」が結成されると、その下位組織として位置づけた。これ以降、彼の政治的キャリアの上昇はこの政党の伸張とともに実現されていく。西アフリカでもっとも有力な政党であったこのRDAは、フランス国内政治の次元ではフランス共産党に近く、植民地支配からの離脱を前面に掲げていた。そのなかでは穏健派であったウフェ＝ボワニはドゴール政権から重用され（あるいは重宝され）、1956年以降、フランス本国の大臣や政務官に数度任命されている。

1958年、「仏領西アフリカ」の独立がタイムスケジュールにのぼったとき、アフリカの植民地の側では2つの選択肢があった。アメリカ合衆国をモデルにした8領土一体となった独立か、あるいはバラバラに切り離して独立するか2つである。内陸国であるために港湾をもたないマリや、仏領西アフリカの総督府が置かれるなど特権的な地位にあったセネガルは、全体での独立を強く主張した。一方、カカオやコーヒーのプランテーションの成功を見込んでいたフランスとコートジボワールは、それが算出する富がサヘル諸国の貧困と相殺されることを恐れて、8ヶ国に分けて独立することを主張した。結果は、ウフェ＝ボワニの思惑通りに進み、彼はフランスと共同歩調をとりながら、コートジボワール一国の経済発展と政治的安定の実現につき進んだのである。

6. ウフェ＝ボワニ政治とその評価

冷徹な現実主義の政治家であったウフェ＝ボワニには、ンクルマのような思想的煌めきもなければ、大衆を動員するカリスマもなかったようである。彼が第一にめざしたのは、植民地期以来のフランスとの協調を維持することであり¹⁶⁾、フランス資本の導入によって国力を増大し、それによって自分の権力を維持することであった。実際、独立以前にフランスの大臣に任命されていた彼は、フランスのために「汚れ役」を引き受けることさえいとわなかった。血で血を洗うアルジェリア戦争が長期化するなかで、アジア・アフリカ諸国のみならず、ヨーロッパやアメリカ合衆国の批判を浴びていたフランスは、アフリカ人の代表であってもフランスの政策を支持していることを示すべく、国連に彼を派遣してアルジェリア戦争擁護の演説をおこなわせたとされている（Amondji 1984：166）。

フランスにあまりに近づいたことから、コートジボワールの独立に反対さえしたウフェ＝ボワニは、そのために国民の反感を招き、何度も政治的な危機に襲われた。独立の直前の1957年におこなわれた選挙では、彼の得票率は南部の主要都市では30%以下でしかなかったし (Amondji 1984 : 170), 1963年には全閣僚の3分の1と、新任の技師、官僚、医師、学者のほぼ全員を逮捕・投獄する「肅清」が約1年間続いた (Amondji 1984 : 181-190)。

反対派の台頭をつねに恐れていた彼は、国内に強固な一党独裁を敷くと同時に、反対勢力を生み出しかねない軍隊を削減し、軍事をフランス軍に委ねることにさえ躊躇しなかったといわれている (Nandjui 1995 : 76)。政府の高官はほとんど全員がフランス人であり、国内の大企業の大半もまた外国資本であった。1964年には、資本金5億セーファー以上の大企業69のうち国内企業は1つだけであったし、1億～5億セーファーの資本をもつ企業179のうち国内企業は11だけであった (Amondji 1984 : 197)。ンクルマが「ネオコロニアリズム」と批判したこうした状況は (ンクルマ 1971a), コートジボワールでは独立後も変わることなくつづいたのである¹⁷⁾。

フランスとの協調を第一にしたウフェ＝ボワニは、アフリカの他の国々に対立することともいわなかった。隣国ガーナでンクルマが打ち出した社会主義や「アフリカ合衆国」の構想を、彼は幼稚な「神話」として冷笑したし¹⁸⁾、西隣のギニアのトゥーレ政権に対しては、反対勢力を国内で支持・育成するなど、露骨な介入をおこなった。1967年に、ナイジェリア東部のイボの人びとが主体となって独立を求めたビアフラ戦争に際しても、西アフリカの強国ナイジェリアの勢力を削ぐ好機と見て、フランスとともに積極的に介入した。また、アパルトヘイトでアフリカ諸国から批判と経済封鎖の対象となっていた南アフリカに対しても、外交を断つことはなかった (Amondji 1984 : 242-247)。

植民地体制をそのまま延長したようなこうした対内・対外政策が、フランスの政界と経済界から大歓迎されたことはいうまでもない。フランスからは多くの資本が導入されて商品作物が拡大再生産されただけでなく、石油化学工場をはじめ、自動車の組み立て工場などいくつかの工場も建設された。銀行業務は拡大され、首都アビジャンは西アフリカでは例外的なほどにビルの立ち並ぶ近代都市へと変貌したのだった。

対外協調主義 (=フランスとの一体化)、一党支配、一国ナショナリズムの強調、開発経済の遂行を根幹とするウフェ＝ボワニの掲げた政策は、独立後の20年間は「アフリカの優等生」、「コートジボワールの奇跡」と呼ばれるほどの成功を収めた。実際、1960年の独立からの20年間に、コートジボワールの経済は12倍に、1人あたりの国民所得は1962年の319ドルが1980年の1310ドルにまでなっている (日本貿易振興会 JETRO 1983 : 5¹⁹⁾)。こうした経済発展が、ウフェ＝ボワニの地位保全に貢献したのは疑いない。国の内外からくり返し批判の対象となった彼であったが、1993年の死までコートジボワールの政治的・経済的権力を一身に集めることができたのである。

しかしながら、1970年代後半以降、カカオやコーヒーなどの一次産品の価格暴落とオイルショックによる石油製品等の値上がりにより、コートジボワールの経済は凋落した。「アフリカの優等生」であったコートジボワールは、海外からの投資の返済が不可能な「借金大国」になってしまったのである²⁰⁾。それと並行して、ウフェ＝ボワニの強権支配による政治的閉塞と、汚職や不正蓄財が蔓延する経済的腐敗に対する国民の不満は高まる一方であった。その不満をそらすべく、ウフェ＝ボワニは首都を彼の生まれ故郷ヤムスクロに移転し、自分の資金だけを用いて世界最大といわれる大聖堂を建立した。彼は1993年に死を迎えたが、その葬儀にはフランス大統領ミッテランをはじめ、フランス歴代の全首相、現職大臣のほぼすべてが出席したほど (Glaser et Smith 2005 : 117-120)、彼とフランスとのあいだの結びつきは強固なものであった。

問題はこのあとである。強権によって国内の統一を維持していたウフェ＝ボワニの死後、コートジボワールが政争に明け暮れたのはある意味で必然であった。反対派を力づくで押さえつけようとした彼の姿勢は国内に複数の武装勢力を生み、1999年のクーデター、2002年以降の国内分裂をもたらし、その争いは2010年の大統領選までつづいた。この選挙も、南部を代表する現職のローラン・バボ (Laurent Gbagbo) と北部出身のアラサン・ワタラ (Alassane Ouattara) のあいだの泥仕合となったが、フランス軍の介入によって後者の勝利が確定されるなど、今日もなおコートジボワールの治安と安定の維持にはフランス軍の駐留が欠かせない事態がつづいている。コートジボワールで繁栄を謳歌していたフランス人やレバノン人は国外退去をはじめたとされており、経済と政治の混乱はいつ再開するかわからないような状態にある。

ウフェ＝ボワニほど毀誉褒貶のはげしい政治指導者も珍しいだろう。彼はコートジボワールの政治を33年間にわたって掌握し、国連がアフリカの平和に尽力した人間に「ウフェ＝ボワニ賞」を制定するほど、国際的にも高い評価を得た（もっともこれは彼の莫大な資金供与による賞だとされている）。その一方で、33年におよぶ彼の治世は蓄財と弾圧と汚職の代名詞でもあった。もし彼が、コートジボワールが繁栄を謳歌していた1980年までに亡くなっていたなら、コートジボワールの建国と繁栄の父として、彼は今も高く賞賛されていただろう。しかし、今日、彼はコートジボワールを分断に招いた張本人として、そしてアフリカとフランスの腐敗した結びつきを象徴する人物として、むしろ批判の対象になる方が多くなっている。

7. おわりに：西アフリカにおける指導者崇拜

ここまで、ガーナとコートジボワールを独立に導いた2人の政治的指導者の経歴と、彼らに対する評価ないし「崇拜」の変遷を見てきた。両者とも栄光と凋落を経験しているが、そうした変遷を通じて私たちはなにがわかったのか。

先にも述べたように、アフリカ諸国のほぼすべては西欧諸国による植民地支配を経験しており、それらの国々の独立が実現したのは1960年前後であった。独立は多くの人びとの熱狂と興奮を生み、さまざまな思想や文化活動となって世界中に伝えられた。しかし、独立直後の熱狂が去ると、新国家の建設が多大な困難に見舞われていることが国内でも国外でも明らかになっていった。

アフリカのすべての国家は多民族国家であり、たとえばアフリカ大陸最大の人口を有するナイジェリアには100以上の民族が存在するとされている。しかも、旧植民地宗主国はほとんどアフリカに投資をしなかったため、どの国でも就学率や工業化率は低く、国内のインフラや交通網の整備も進んでおらず、人口の多くは農村に居住している。しかも、その農村の多くは植民地期に強制されたモノカルチャーの後遺症に苦しんでいるのである。もし国民国家が、ベネディクト・アンダーソンがいうような歴史的記憶の共有と文化的共通性に基礎を置くものであるとするなら、政治的独立を実現したアフリカ諸国にとっての最大の課題は、いかにして経済的自立を実現し、それに基づいて国民統一を実現するかという点にあったのは疑いなかった。

このとき、アフリカの政治的指導者には2つの可能性があったように思われる。1つは、ンクルマに代表される理想主義的な政治家がとった政策であり、彼らは外国勢力と手を結ぶより、経済的・政治的な自主独立をめざして、アフリカの自立と統一を希求するパンアフリカニズムに訴えた。しかし、長い植民地支配の過程で経済的・社会的に円熟していなかったこれらの国家に、性急な自立が可能であるはずはなかった。カリスマ的な能力と指導力を備えていた彼らは、独立直後は高い人気と熱狂をひき起こしたが、やがて国内外の反対勢力によるクーデターに見舞われ、国外追放されるか投獄されることとなった。

もう1つの可能性は、ウフェ＝ボワニに代表される現実主義的な政治家がとった政策である。彼らは対外協調路線を採用し、国内では強圧的な政治を行いながら、外国資本の導入を通じて経済発展と国民統合を柱とする国家建設に尽力した。彼らはコーヒーやカカオ、コットン、落花生、果実などの商品作物の生産を拡大し、それで得た富を、国民の生活向上とインフラ整備、工業化の推進等に投資した。彼らもまた一時は国民の高い人気を誇ったが、その政権が数十年にわたってつづくあいだに必然的に腐敗したものとなり、多くの批判の対象となっていったのである。

そのような腐敗は、権力とは腐敗するものだという格言以上に、彼らの政策の矛盾の必然的帰結であったように思われる。彼らの採った政策は一定期間のあいだかなりの成功を収めたが、それは外国資本や外国勢力に依拠するものであったがゆえに、根本的な矛盾を抱えていた。彼らは国内をナショナリズムで統一しようとしたが、政治的理念をもたない彼らの手中にあったのは、外国勢力、とりわけ旧植民地勢力と手を結ぶことで実現可能な経済発展だけであった。そこには根本的な矛盾が存在していたのである。そ

の矛盾を克服するためにも、彼ら指導者は商品生産を拡大し、経済発展がもたらす富を国民に還元していくことがつねに必要であった。しかしそうした政策の遂行は、外国資本とその背後にある旧宗主国の政治に依拠するものであったがゆえに、権力の行使に国民のチェックが入りにくく、つねに政治的腐敗と汚職にさらされるのは必然であった。独立後のアフリカ国家の多くは国民統一の掛け声の下に一党制を敷いたが、その実際は腐敗の温床でしかなかったのである。

多民族国家であるアフリカ諸国では、国家の統一はしばしば複数の民族集団の抗争によって脅かされてきたし、一次産品の国際価格と外国資本の投資に依存するその経済は、決定的な脆弱さを脱することができないままであった。ようやく近年になってアフリカの石油等の資源が注目され、アンゴラやナイジェリア、ガボン、サントメ・プリンシペなどでは空前の経済成長を実現できるようになっている。しかし、資源に依存したその経済的繁栄の享受は一部の特権階級にかぎられており、国民の大半はそうした経済成長から取り残されたままである。そうした点に、アフリカにおける指導者崇拜が長続きしない理由があるように思われるのだ。

現代では政治的指導者が国民各層の高い人気を獲得するのは、すなわち政治的指導者が崇拜の対象となるのは、彼らが国家建設と国民統合に大きく寄与していると判断されたときだろう。その意味では、現実的な政治家より、理想主義的な政治家の方が、シンボルとしては操作しやすいはずである。彼らの政策はしばしば性急さゆえの過ちに陥ったが、政策上の過ちと理想の不誤謬性とは共存可能である。実際の政策において誤ったとしても、それは彼らが掲げた理想を否定することにはならないからである。これに対し、現実主義的な政治家の場合には、その政策の成否がすべてである。もしそれが具体的成果をもたらさないとすれば、その瞬間から彼らに対する評価は低下し、誰も彼らを評価ないし崇拜することはなくなるだろう。

かくして、今日ではウフェ＝ボワニが否定的にのみ語られているのに対し、ンクルマやマリのケイタをはじめとする理想主義的な政治家の多くは、その政策の複数の過ちにもかかわらず、さらにいえば短命であったがゆえに、今もなお国の内外で評価されつづけているのである。

注

- 1) たとえばガーナでは、17世紀に始まるアシャンティ王国が領土内で絶大な権威を誇っていた。ガーナの独立に際し、アシャンティの王アシャンティヘネ (Asantehene) は、即時完全独立を掲げるンクルマの運動にくり返し対立したし、旧宗主国のイギリスもより微温的な彼らとの協働と支援を公然と続けていた (エンクルマ 1963: 109sq.; Davidson 1973: 116-120)。ンクルマの支配はこうした伝統的な権威構造を廃したところに成立したのであったが、最終的に彼の政権を覆したのは、伝統的な権威構造と結びついた反対勢力であった。

- 2) これらの諸国の対外協調は、外国軍の駐留というかたちで実現されている。セネガルにはフランス海軍基地が置かれているし、コートジボワールのウフェ＝ボワニは、クーデターの温床となりがちな軍部を排除するために国軍を廃止して、緊密な協力関係にあるフランス軍のみを駐留させようとしたほどであった (Nandjui 1995 : 76)。
- 3) マリは、2007年にアメリカ合衆国によってアフリカでもっとも民主的な国家のひとつに選出され (5ヶ国のうちの1)、特別の経済援助の対象国とされている。この論文を書いたのは2010年であり、当時のマリはアフリカ諸国のなかでもっとも民主的で平和な国として評価されていた。しかしその後、2011年の北部のトゥアレグ人独立運動の激化により、国土は二分され、クーデターが生じている。
- 4) ゴールドコーストが影響を受けたサハラ南縁の国家のひとつに、古ガーナ帝国がある。この国家は西アフリカ最古の国家のひとつとして西暦7世紀頃から12世紀まで繁栄したが、この国家の影響が現在のガーナの地にまでおよんでいたとの多分に神話的な語りの存在 (Rouch 1956)、あるいはンクルマによれば古代ガーナ帝国の建国に当たったのが現在のガーナ出身の民族だったとの伝説が (エンクルマ 1962 : 86)、その独立に際してガーナの名を採用した理由であった。サハラ以南アフリカの最初の独立国であったガーナは、神話的な装いを採用することが建国に当たって必要だったのであろう。
- 5) ンクルマの経歴は、彼の手になる自伝 (エンクルマ 1963) と、いくつかの研究書による (Davidson 1973 ; Laronce 2000)。
- 6) それは、アフリカ系の著名な人類学者メルヴィン・ハースコビッツがノースウェスタン大に開いたアフリカ研究センターであった。
- 7) ンクルマとパンアフリカニズムの関係については、Laronce 2000 ; Hakim and Sherwood 2003に負うところが多い。
- 8) ンクルマはペンシルヴァニア大の博士課程に進学して、植民地主義のテーマで博士論文を準備したかったようだが、これは大学当局から拒絶されたという記録が残されている (Laronce 2000 : 33)。
- 9) 谷本圭介によれば、ンクルマ政権による投資は主として道路や通信網の整備に向けられ (全体の約70%)、工場の建設は外国資本の導入によるとされた。しかし、外国からの資本導入は実現できず、そのため国内産業の発展と若年失業率の低下を実現することはできなかった。その結果、カカオの国際価格が暴落した時、ンクルマ政権を支持する母体は存在しなかったのである (谷本 1968)。
- 10) ンクルマの社会主義は、マルクス主義に基づくものではなく、つぎの引用に代表されるようにアフリカ独自の平等主義に基礎をおくものであった。この点は、彼のプレーンであったパドモアの『パンアフリカニズムか共産主義か』にくわしい (Padmore 1960)。
- 11) カカオの国際価格は、ガーナの独立の年である1957-58年のトン当たり352ポンドをピークに、1958-59年には285ポンド、61-62年には170ポンドと低落し、ンクルマ失脚の前年の1964-65年には100ポンドを割るにいたった (山口 1977 : 103)。これがそのままンクルマ政権の弱体化につながったのである。
- 12) ンクルマの死の知らせを受けたギニアのトゥーレ大統領は、彼の盟友を集めてギニアで国葬をとりおこなった。その席で、彼の盟友であったギニアビサウのアミルカル・カブラルは、ンクルマを「植民地主義に対する天才的な戦術家であった」と評して、その死を悼んだという (Davidson 1973 : 217)。
- 13) ンクルマが海外に亡命していた1972年に、ガーナでは再度クーデターが発生し、政権を掌握し

- た新政府はンクルマの復権を実現した。ンクルマの病気と死は彼の帰国を不可能にしたが、ガーナでは盛大な国葬が営まれたという (Davidson 1973 : 205)。
- 14) コートジボワールの歴史, およびウフェ＝ボワニの経歴については, 竹沢 2001 ; Amin 1967 ; Amondji 1984などによる。
 - 15) ながく未開拓の土地であったコートジボワールでは, 土地の所有はリネージないし村を単位とする共同集団であった。フランス植民地政府は, 換金作物の栽培を強制するためにこうした伝統的な集団の所有を禁じ, すべての土地を私有地化する政令を第一次大戦中に発布した (竹沢 2001 : 135)。ウフェ＝ボワニの家族は, この政策から最大の恩恵を受けていたのである。
 - 16) コートジボワール国内には, 国民が接近できないレストランや遊技場, 盛り場がたくさん存在した。首都アビジャンのいくつかの建物には, 「コートジボワール国民の立ち入りを禁ずる」との張り紙が貼ってあったという (Amondji 1984 : 158)。
 - 17) コートジボワールがフランスの汚れ役を引き受けていたことについては, ヴェルシャヴ 2003 がくわしい。この著者によれば, フランスからは対外援助の名で大量の資金がアフリカに提供されていたが, その多くはフランスに還流して政治資金として活用されたという。領収証も収支決算書も必要のない, まことに便利な非合法の資金であった。著者はこうした状況を, フランスとアフリカが癒着していたという意味で「フランサフリカ」と呼んでいる。
 - 18) ガーナが独立する直前の1956年に, ウフェ＝ボワニはンクルマやサンゴールらを批判して, つぎのようにいっている。「独立の神話が, 現代のわれわれの世界を駆け巡り, 揺さぶっている。つねに建設的でないこうした神話より, われわれは友好を好むのだ」 (Amondji 1984 : 165)。「友好」がフランスとの友好を意味していたことはいうまでもない。
 - 19) JETRO の『コートジボワール』は, 「ブラック・アフリカの非産油国中最も豊かな国となっている」(p. 5), 「当国の安定性のもうひとつの理由は, こうした経済的な豊かさを背景に, 強力な指導者フェリックス・ウフェ＝ボワニ大統領を得たことを挙げねばならない」(p. 1) と, 手放しの称賛ぶりである。
 - 20) 1970年の対外負債 2 億5600万ドルが, 1980年には42億6500万ドルにふくれあがった。それは国家予算のそれぞれ18.3%と41.9%に相当した (Amondji 1984 : 292)。国際経済学者サミール・アミンによれば, それはコートジボワールの「発展のない成長」の必然的結果であった。「この15年余りのコートジボワールの進化の経験は, 「発展のない成長」として特徴づけられる。つまり, 外部によって生み出され維持された成長であり, そこでは経済社会的諸構造が後期の段階へ, すなわち自律的で自己維持的なダイナミズムへと自動的に達することのない成長なのである」 (Amin 1967 : 192)。

参考文献

(英語)

Amin, Samir

1967 *Le développement du capitalisme en Cote-d'Ivoire*. Paris: Editions du Minuit.

Amondji, Marcel

1984 *Felix Houphouët et la Côte-d'Ivoire: L'envers d'une légende*. Paris: Karthala.

Beattie, John

1960 *Bunyoro: An African Kingdom*. New York: Rinehart and Winston.

Davidson, Basil

1973 *Black Star: A View of the Life and Times of Kwame Nkrumah*, London: Allen Lane.

Evans-Pritchard, E. E.

1948 *The Divine Kingship of the Shilluk of the Nilotic Sudan*, Cambridge: Cambridge University Press.

Glaser, Antoine et Stephen Smith

2005 *Comment la France a perdu l'Afrique*, Paris: Hachette.

Hakim, Adi and Marika Sherwood

2003 *Pan-African History*, London: Routledge.

Kaké, Ibrahima Baba

1991 *Nkrumah et le rêve de l'Unité africaine*, Paris: Editions Chaka.

Kuper, Hilda

1947 *An African Aristocracy: Rank among the Swazi*, London: Oxford University Press.

Laronce, Cécile

2000 *Nkrumah, le panafricanisme et les Etats-Unis*, Paris: Karthala.

Nandjui, Pierre

1995 *Houphouët-Boigny: L'homme de la France en Afrique*, Paris: Harmattan.

Nkrumah, Kwame

1967 *African Socialism Revisited*, Prague: Peace and Socialism Publishers ([www://Marxists.org/subject/Africa/Nkrumah/1967/](http://www.Marxists.org/subject/Africa/Nkrumah/1967/) より引用).

Padmore, George

1960 *Panafricanisme ou communisme?* trad. franç. par Thomas Diop, Paris: Présence africaine.

Rouch, Jean

1956 Migrations au Ghana, *Journal de la Société des Africanistes* 26: 33-196.

(日本語)

ヴェルシャヴ, フランソワ = グザヴィエ

2003 『フランサフリック：アフリカを食いものにするフランス』 大野英士・高橋武智訳, 東京：緑風出版 (François-Xavier Verschave, 1998, *La Francafrique: Le plus long scandale de la République*, Paris: Le Stock)。

エンクルマ, クワメ

1962 『自由のための自由』 野間寛二郎訳, 東京：理論社 (Kwame Nkrumah, 1961, *I Speak of Freedom: A Statement of African Ideology*, London: Heinemann)。

1963 『わが祖国への自伝』 野間寛二郎訳, 東京：理論社 (Kwame Nkrumah, 1957, *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh: T. Nelson)。

1964 『アフリカは統一する』 野間寛二郎訳, 東京：理論社 (Kwame Nkrumah, 1963, *Africa Must Unite*, London: Heinemann)。

1971a 『新植民地主義』 家正治・松井芳郎訳, 理論社 (Kwame Nkrumah, 1965, *Neo-Colonialism: The Last Stage of Imperialism*, Edinburgh: T. Nelson)。

1971b 『解放運動と武力闘争——コンゴの挑戦と教訓』 野間寛二郎訳, 東京：理論社 (Kwame Nkrumah, 1967, *Challenge of the Congo*, Edinburgh: T. Nelson)。

日本貿易振興会編集 JETRO

1983 『コートジボワール』 貿易市場シリーズ, 20. 東京：日本貿易振興会。

竹沢尚一郎

1987 『象徴と権力——儀礼の一般理論』東京：勁草書房。

1988 「権力の原型と変形——西アフリカ・マンデ系社会における首長制と国家」『季刊人類学』19(4): 4-24。

2001 『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』京都：世界思想社。

谷本圭介

1968 「エンクルマ政権崩壊の原因」日本国際政治学会編『国際政治』36（第三世界：その政治的諸問題）pp. 132-149, 東京：日本国際政治学会。

山口圭介

1977 「エンクルマとニエレレ——国民形成の思想と行動を中心に」『国際政治』57: 99-119。